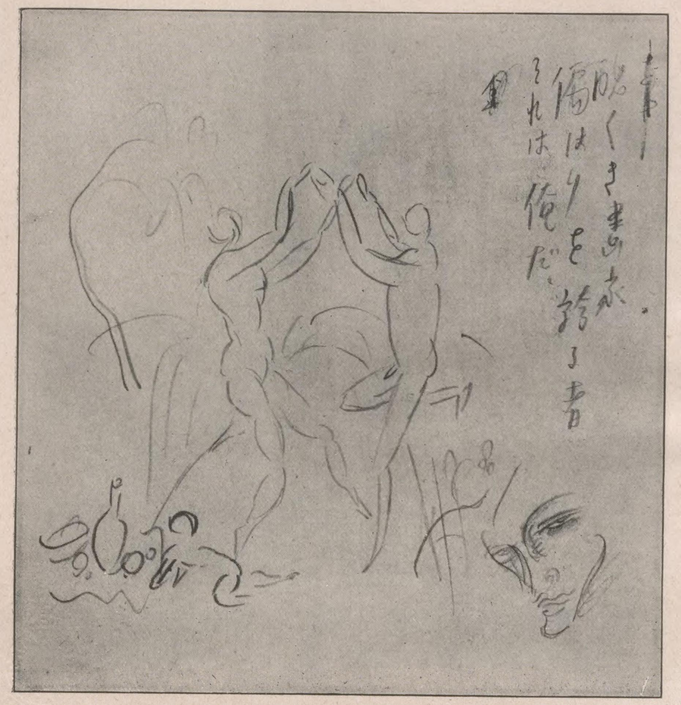
題　り　「ロスキーゴ」（一九一七年）

（鉛筆0、50尺×0、45尺）

31

藏氏平恭田川



(袋半0.30K×0.45K)

31

(半上)

「スケッチ」 (一九一中筆)

編 丸平落田川

合信の自由機字「エスドース」（一九一七年）

（紙筆1.00尺×0.65尺）

32

今關營用氏藏

春信の自由模写「エスキース」（一九一七年）

（紙筆1.00尺×0.65尺）

32

藏氏司營關今

33

（ポケット）　レースをかけた木綿毛糸で編む

約0.7×0.5メートル

浦田哲太郎氏藏

二人の女「ヱスキース」

（一九一七年）

（ペン画原寸大）

33

個人蔵

二人の女ヒストリー　（昭和十年）

（六〇画風主人）

編丸洲太晋田熊

信州日記——製作と思考——

一九一五年一〇月一四日より

序

あらゆる退化を示したる過去を振り切つて自分はなつかしい信州へ來た。

自分の新生は始まるのだ、過去をすつかり棄てた、自分は五十枚の木炭畫を作る事を計畫した。それらに自分は自分の藝術のあらゆる光を輝やかし表はすのだ。

それ等をして自分は自分の藝術の誕生たらしめる。

美麗なる自然は見よ新しく冷めたい秋の空氣の中に確かに實在してゐる。

それ等から自分は呼吸しやう、

そして描く、

山脈を、樹木を、高原を、又人間を、堂々と描く、

チョークの箱には黑ダイヤの如きコンテが澄みかへつてゐる、カルトン
には紙が滿ちて居る。

一〇月一四日　晴

朝から掃除なり、しかし至極簡單だ。空氣が氣持よく冷めたい、いゝ氣持だ。一三回大屋へ下りて見る、いゝ空で風景が素敵、うれしくなつた。この邊の自然は實に純粹だ、東京なんぞに働いて居る子僧共を嘲けつてやりたくなつた。

描かう、大に、

下の菓子屋にぶどうがうんとざるに盛つてあつた。そして、そのそばに美しい草花がうんと咲いて居た。

大屋橋に近い鯛燒屋には鯛燒が五六疋一列にならべてあつた。

午後寫生にゆく、

第一の繪はまんまとしくじつて中止した、歸つてぶどうや柿を喰べた。

それから掃除を手つだひ湯に行き夕べとなつた、夜十時頃寢た。

一〇月一五日　晴

朝はずい分冷めたい、それにひどい霧だ。昨日の場所で再び寫生、また興味來らず中止する、ぐんぐんと描けるといいが、中々そう行かん、一〇月一一月一杯死物狂ひに描かう、四五日間に五〇枚のデツサンは是非作らう、五〇枚の木炭紙と三ダースのコンテーとを買はなければならん、三圓五六十錢要する譯だ。それは武俠の原稿で作る。

俺はうんと健康にならなければならない、ぐんぐんと。俺は神經衰弱に罹つて居る。

頭が實にメランコリツクだ。エネルギツシユにならなければ不可けない。煙草、酒、何も遣らない、來秋まで。

午後上の方の村へ行き農家を寫す、俺は或る確信がついた。

セザンヌの透明は俺のものでは決してない。

俺の物は「俺自身」の藝術だ、俺はもう迷はぬ、うんうんと描く、

明日からうんと描くぞ、そして一の素描展覽會を形成する、今月中に二十枚位仕上げやう、何しろ無暗矢鱈に描くんだ、

北さいのやうに、

よめを十枚
風景を二十枚
おばさんを五枚
おぢさんを五枚
いくちやんを五枚
自畫像を五枚

何しろ室外で描ける間に風景をうんと描いとこう。

三時柿をうんと喰つた、夜クマ木氏來る。

一〇十六日　晴

今朝起きると空美しく空氣溫たかにいい氣持だ。

考へて見ると昨日の畫は矢張り失敗だと思つた。も一ぺんあすこを描こう。今度、何しろもつとバツシヨンが來なくては駄目だ、ゴツホのバツシヨンが、俺は矢張りゴツホ的な生命を得る可き人間であらうと思ふ、俺は落着いた人間ではない、今はゴツホかセザンヌの眞似をして居るから不可ないのだ。

もつと野蠻にもつと勇猛にならなくてはならない、

執拗で孤獨な藝術がむしろ俺の道だ、

「山國の素描」

止み難き俺の努力を見よ、

來秋を見よ、

信州と言ふ所は無暗に腹のへる所だ、始終腹がへつて閉口だ。

午後大屋橋附近を寫生す「立體の要求」に俺は近づいて居る、

恐しい立體の感じを現はして見せやう。

一〇月一七日

俺は全然改宗したい、絶對にあらゆる過去を打破つて全然新しい歡喜に身を沈めたい。

それには唯一つの道しかない、それは自然にたよる事だ、

習作時代と言ふ物の存在は俺には矢張り必要だ、

俺は飛び上がらう、十年の仕事を一年で遺らう、怖るべき努力で、

「鐵の藝術」を創始しやう、

今朝停車場附近の倉庫の群をうちの横からやつて見た、セザンヌの「立體」の尊さが染々感じられた。

午後はクマ木さんと雜談に時を移す、

今日體重十五貫六百八十匁だつた、

毎日はかつて見やう、

肉體の健康が何よりだ、あらゆる精神的精力はやはり肉體から生れる。

強い實に強い人間になりたい獅子の樣に強く、

一〇月一八日　雨

わがヘレニズムの靈は何處へ去つてしまつたのか俺は全力を擧げてそれを取り戻さう、

今日は雨だ、メランコリツタな氣持だ、

おばさんをモデルにしてボルトレを描いた、

概念的なものになつてしまつた、何故俺には、もうすこしいゝ面が描けないのであらう、

Taiyaki を懷中して大屋橋の河岸を歩いて見た、いゝ氣持であつた、

俺は少し熱があるらしい、喉が痛い、

笠原、小杉、笹へ三枚葉書を出した、

かへり時事新報を買つてかへつた。

來春俺は個人サロンをやらうと思ふ、

日比谷ガレリーか何處かで、

長島、馬越を加へてやつてもいゝ、素描五〇點を信濃で描いてならべやう、午後またステーション横を描いた、

面のスタジーをよつぽどやる必要がある、

毎日々々何でもいゝから描かう、何かに到達するであらうから。

二十五歳までは習作時代だ、俺はコツコツ絶へず勉强しやう、

夜、魔猿傳を作り終へる風邪をひいたと見えて實に不快だ、

夜、ろくろく眠られなかつた。

一〇月一九日　晴

今日はすばらしく上天氣だ、朝いくちゃんと一緒に上田へ行き松茸を買ひ歸りは歩いた。上田はいゝ町だ、かへれば僕の繪のエハガキが來て居る、

まづくうつうた、うち、笠原、高橋へ送つた、それより上の村へ行つて一枚デツサンをやる、風邪心地で強い感情が出得なかつた。

夜、いくちゃんと活動へ行つた、美人辯士出演といふので大入であつた、ろくなのはなかつたが「ハムレツト」は美しかつた、

オフエリア姫が池へ落ちるところは物哀れであつた、十二時かへつて來た芝居がへりの青き月夜はいかにも美しかつた。

一〇月二〇日

午前大屋神社裏の畑から對岸を見て描く、美しき Kiraku さんが一寸顔を出した、俺はセザンヌの透明を得んとしてしきりに努めたが要するにたはいもないものになつてしまつた、明日もう一ぺんここへ來て描かう、

一は藝術の爲め、一は、美しきかの人を見るチヤンスを得んが爲め。

豪壯なるタブローが得たい念がしきりだ、

風邪は殆んど治つたらしいが又鼻がくん〳〵言ふ明日から一つ毎日々々遠足をしてやらうかな、

午後「魔猿傳」半分書く夜いゝ月夜だ、散歩した、

神川館でも安樂でもどこでも三味線がきこへた、かつへておばさんの一絃琴をきく、

染々 Kawai の Kimikasan や Kirakusan を思ふ。

僕が或るラブを抱くのは どうしてこうデカタンな階級の女ばかりなの

であらう、やはり僕の性質が、プラトニツクでなくDesire その物に正直な故だらう、たとへばナイチンゲールにしろ僕はその接近した氣持は持たなかつたのだ。概念で考へるのも、貧乏したい事だが僕對女はどうしてもサチール對ニンフだ、

一種の怪奇なコントラストが成り立つ譯だ、

僕にはある直感力自分の性質とうまく合つた直感力がある、俺はだから大抵の場合裏切られる樣なことはしないつもりだ、だが、この直感力はエネルギーの滿ちた時でないと効果を奏しない、だから俺にはエネルギーさへ滿ちればいゝのだ、さうすればうまく出世し得られる、常にライトサイドを見て居ることが出來る、

今は決してその時でない、

今はエネルギーが缺けて居る、

俺はいま悲哀に沈んで居る、俺の肉體と肉體に走る心とは曇つて居る、

美しい物も激しき感動を俺の心に呼び醒ます事がない、

俺の眼は火でなくなつた。水の樣な物になつた、

冷めたき物靜な物、優さしき物が俺の心を動かす、

それ故俺は冷めたく靜かに暮す、

是は一九一四年春の頃の俺ではないのだ、そして、一生を通じてこの俺でもないのだ、しかしそれは今の俺だ、

是は動かす事の出來ない事實だ、是は自然だ、

俺は自然に自分の運命を捧げて居る、

ただ、そして自然を思つて居る。

一〇月二一日　曇天

午前臘猿傳を終へて武俠へ送つた、

午後昨日の場所で寫生、灰色の厭な日である、夕方おいなり様へ行き福引におもちやの兵隊を貰ひおみきを一杯貰つた、

いゝお祭りだ、

自分のエネルギーの充實しない事にある不滿を感じる、

しかし時季によるので仕方がない、

體重一五貫九百目、

玻璃窓をけづりて夜風過ぎゆけりわがかなしみをさらへゆきてか

恐ろしい力と共に俺が「眞」の生命の大地に投げ出されその大きな土地を苦しみあえぎ或は悦びうたひながら旅する日を俺は切に待

つて居る、そして、その日はそのタイムは俺の心の中に秘そんで居る、

そして、その時、俺はゴヤであり、

ゴツホである、

願はくばその時に早く達したい、

一〇月二二日　半晴

さみしい日だすべてのものがしやくにさはる、俺から「華麗」の分子が總べて逃げてしまつた、俺は何と言ふ貧人であらう、もつと、わめき、もつと叫び、もつとあばれたい、

獅子の如く踊り出したい、

獅子は俺のシンボルだ、

「弱りし獅子」で俺はある、

俺は今「自己」を掘り出す爲めに働いて居る恰もポンペイ發掘に從ふ人の樣に。横道へそれた、方法がまちがつて居た、俺は廣さを深めやうとし深みを廣げやうとしなかつた、

藝術に達する道は後者一つにある、

ああ、しかし我々は何と言ふ概念的な道を歩いてることであろう、

もつと直觀的に、農人か子供の如くに行き度い。

世の中は何と言ふ馬鹿野郎どもの寄合であろう、かゝる世の中に向つてこつちからまゐる必要がどこにあるのだ。

個人性の強きをもつならば——

午後おばさんを描き

夜シネマに行く、狂が來て居てある恐怖を感じた、

力よ、力よ、

俺は汝をまつて居る、

力よ、

汝は必ず俺に來るのだろうな

汝が俺に來ないならば

俺はただ乞食の樣に沒落するのみだ、

世は暗だ、

力よ、
どうか俺を見すてないで呉れ
俺が俺の藝術が
世界を呑むためには

力よ、
絶對の力よ、
美しき力よ、

一〇月二三日

俺は一二月から眞にラフアエロ的な光榮なる生活に入らう、あらゆる點で强者である、そして歡樂兒である、そのグロリオクスライフに。

一二月は笠原君のお母さんにモデルになつて貰つて壯麗無比なるポルトレートを描かう一月からは一間に一間半もある大畫布に秋まで俺は素晴らしい努力をするのだ、すべてに於いて完成したタブローを作るのだ、俺はすくんで居ない、晴々と子供の心を持つ、空の如く透明に花の如く盛だ。

ああ、デカダンスを一切けちらしてそこに踊り上る俺の胸よ、

今日は午後おちさんをまた描いた、うちと高橋からハガキ、

うちと水木へハガキ出す、

夜小杉さんと田中さんへハガキ書く、

一〇月二四日

朝上田へケントと木炭紙を買ひに行く、山にすこし金粉がかかつてい、
景色だつた、かへつて頭を刈つた、
大屋の町には兵隊が澤山來た、午後何もせず大和田へハガキやつた、

一〇月二五日　微雨

これから描く五枚の素描は嚴格を極めた物にするのだ、
しかし今日は描かない、
また何もしない、

甘　汞　33%
華　攝　林　9%　メチニコフの製藥
ライソン　58%

狂はん狂はんわれ狂はん
狂ひて描かん狂ひて描かん
ああわれは心も張りさけて
狂ひて描かん

過去がすべて徒事に滿ち居た事の
何と言ふさびしさぞや
また現在さへも
われは現在を打破らん、

野牛の如く狼の如く惡鬼の如く
われは藝術に食ひかゝり
自然につかみかゝり
命をもつき破らん

どうしたと、

のたうちまはれ

毒藥を仰ぎたる人の如く
大都の屋根の上を

にゆつと藝術をしぼり出せ
チユーブからニユツとギヤランスの出る樣にニユツとウルトロメ
ールの
ニユツとコバルトの
ニユツとカドミウームの出る如く
にゆつとにゆつとしぼり出せ
一體
それがどうしたと言ふのだ
大甘野郎のトンチキめ

一〇月二六日　雨

朝うちとわたなべのおばさんからてがみが來た、わたなべのおばさんの手紙はナイチンゲールのエンゲイジを報じて來た、夕方熊さんを描いたら中途で逃げられちやつた、がつかりだ、

ゆきたくば好きなところへ死んでゆけ

×、俺は來月の末歸つたらまづ鏡と木炭紙とコンテとを買ふのだ
そして自畫像を二十枚描く

早くオレの金が來るといゝと思ふ、

一〇月二七日　晴

朝べんとう持ちでうちを出て鳥帽子ケ岳へ登つた、いゝ山だつた、二時頃かへつた。

一〇月二八日　晴

今日も無爲、べらぼうに冷めたい日だ、午後熊さんを描く、かなり忠實に出來た、あの調子で以後しばらく行きたい、

一〇月二九日

午後二枚描く

一〇月三〇日

朝上田の方面を歩いた、

太郎山かけての野は實にいゝ野だ、

ああ美しきかな、

與里が僕の畫を日々で評した、

中々よく評して吳れた、ありがたい、

武俠の金は來ないのかな、おばさんへハガキ書く、

武俠の金が來ずコンテのあとつぎが出來なかつたらそのあとは遠足を

うんとするんだ、そして剛健な身體を作るのだ、

何糞べらんめい、

何者にも俺は負けないぞ。

そして第二回目の征服、計畫の實現の爲め東京へはせ上るのだ、

第二期藝術計畫

——一九一五年二月——一九一六年一〇月

一　素描の完成

二　色彩の强劇

三　生活の成形

四　黨派の結合

一に就いては素描をして全人格的の物たらしめ手藝に向はしめざる事

二に就いては色彩の最高强度のみを以つて自己の藝術にとるべし

三に就いては個人としての生活を侵略されざる樣に生活すべし（物質上の事は別物）

四は對社會に對する防備なり

自己——自然
藝術

の三角關係の上に最も僞はらず
生活すること次期の目的は

跋

亡友中澤臨川が、最後に讀んだ書籍は「槐多の歌へる」であつた、臨川は八月の九日に死んだ、八日の朝或る友人が見舞ふと、

「昨夜は面白い夢を見た、槐多少年が火の車に裸で乘つて來た、火焔は車輪から軀に燃え盛り纒はつて居る、槐多は大口を開いて笑ひながら踊つて居る、その内火焔が八方に飛び散つて、俺の方へも降りかゝつて來た、處で目が覺めると、槐は寢床から二尺も顚り出して居た、面白い夢であつた、多分昨日讀んだ「槐多の歌へる」から來た幻想でもあつたらう。」

と語つた、そして翌日は、ホントに槐多の火焔の舞を見に旅立つて仕舞つた、臨川が旅立つた先きには、彼の兄の如く思つた國木田獨歩も居る。彼を兄の如く思つた押川春浪も居る、火の車の童形の槐多も居る、私は

槐多のやんちやん振りを生前見る毎に、獨歩の醉興を思ひ出した、春浪は槐多が小遣ひ取りに書いた、猿の人に化した話などから、彼の鬼才に舌を捲いて、時には旅行を共にした事もある、死んだ人が、生けるまゝの魂で今も何處かに居ると假定すれば、槐多は多分彼の連中の間で、如何なるやんちやんも認容されて、愛されて樂しくあるであらうと思ふ「六本手ある女のダンス」は彼が第二回の院展に出した、比較的纏まつた、大作の部である、火の車の上の裸形の踊りの話を聞いて、彼の繪をも私は思ひ出した、ほしいまゝなる赤色の山水、息づまる程に熱い空氣、それが彼の夢幻境で、彼の淨土である、結勺水墨に安住しさうな私の畫境、結勺里芋と地酒で笑つて濟みさうな私の趣味斯う云ふタチの男は長生きするだらう、先きへ行つた連中を思へば、私自身を欠呻びにする。

小杉未醒

後記

○ともあれ村山槐多と云ふ一人物は、自分にとつては生涯忘れてはならないし忘れ得ぬことゝ思ひます。

○村山槐多遺作展覽會、詩集槐多の歌へる及び槐多の墓、槐多の歌へるその後、とこの槐多畫集と云ふ順序で大へん、この畫集の出版がおくれてやうやく、この度世に出ることになりましたが、これで槐多君のものは勿論完全とは言へぬか、作品、及如上の事柄によつてある程度までである世界に、記錄されたことゝ思ひます。そして、後にゐる者の仕事としては、一先づ、之れで完了になつたわけであります。

○この畫集には、遺作展覽會の時、それぞれ愛藏者を得た作品の殆ど全部とその他をあつめて編むだつもりですが、最も代表的な作「六本の手ある女」が矢張り漏れることになり、この點殘念に思つてゐます。

○また、始めこの畫集に槐多藝術觀と云ふことにして槐多の歌へる、よりそれを抄錄して編むつもりでしたが、最近「信州日記」の一篇を新たに得ましたので槐多の歌へるを補充る意味でたんにそれにあてることに致しました。一切の意味で Value を得ることにな

ると思ひますので。

○さて、この畫集が世に出るについては、遺作展覽會以來槐多君に對する大方の愛によること多大でありまして且この度は、作品所藏家諸氏の少なからぬ間、作品お貸與下されたことによるもので、こゝに厚くお禮申上げる次第であります。

○また、畫集出版について、序文、跋文を、よせられた、北原鐵雄氏、小杉未醒氏、山本鼎氏に感謝申上ます。

○尙、序乍ら遺作展覽會を開いて下された野島淵正氏、墓の建設に御盡力下された、槐多君の同窓諸氏、と、その際、とくに我々の所有になつた「カンナト少女」の作品を御購入をお願することの出來た、有馬武郎氏に再び深く御禮申上げておきます。

○最後に、この畫集は、始め友人山本二郎今關啓司兩氏によつて發議せられたものであつたが都合で私が編者になつたことを一言添へて、この筆をおきます。

（一九二一年一一月一日、本郷千駄木町にて、編者）

村山槐多略傳

一八九六　九月十五日横濱市神奈川町に長男として生る。（父の在職地）

一九〇三　三月京都市立銅駝幼稚園を終る。

一九〇九　三月京都府師範學校附屬小學校卒業。四月京都府第一中學校に入學す。

一九一〇　水練伊勢歡海流奥傳五里免許を得。この頃より文藝に親む。（中學二年）

一九一一　『强盜』『銅貨』『孔雀石』『アルカロイド』など〻云ふ廻覽雜誌を友人とつくる。

一九一二　同級生Yなる美少年を愛戀し大いにロマンチックの夢に醉ひ狂的畸行を演じ、一方ボウドレイル・マラルメ・ポー等のデカダン詩人に憧れバルナシアンを以て自ら任ず。

一九一三　此れ等の刺激によつて劇詩『鐵の童子』二章、戲曲『惡女時期』三幕『銅の綠青』一幕等を作る。

木版畫コマ畫等を作る。

一九一四　三角派立體派未來派等の畫流に從つて製作せる水彩畫を唐紙に描き其他の版畫を加へて展覽會を開き、大いに賞讃を博す其作の一部は記念として學校に保存せら

る。
その中に愛人をひそかに撲せる『光の王子』あり。
三月中學校卒業。
六月上京の途中信州より大阪朝日新聞に『繪間堂を仰ぎて』の一文を寄せて三日許り、其の京都附錄に連載さる。文章はナショナル、ギャラリーの建設を提唱せるものなり。
この月より小杉未醒氏の家に寄寓す。九月日本美術院研究生となる。
十月第一回二科展覽會に水繪『植物園の木』『庭園の少女』『田端の崖』『川沿ひの道』を出品す。

一九一五　四月美術院第一回試作展覽會に油繪『六本の手ある女』外油繪數點出品す。
『尿する裸僧』『癩者』未完成に終る、
大作『女子等と癩者』未完成に終る、
九月第二回美術院展覽會に水繪『カンナと少女』出品す。

一九一六　春。小杉未醒氏方を離れて獨居す。
美術院第二回試作展覽會に『素描』四點出品す。

モデルT女を戀し猛烈に彼の女を追ふ、ついに失戀して山國に放浪の旅に出る（五月頃）そして三河の岡崎にて兵役の檢査を受けて歸京す。油繪『猿と女』百號を作る。
七月山崎省三君を伊豆大島に追ふて同君と一夏を過す東京に於ける生活は午前は研究所、午後は燒繪をした工場にて。
この年は割合に作畫す。酒を愛す。

一九一七　三月美術院第三回試作展覽會に油繪『湖水と女』素描『娘のコスチウム』を出品し、美術院賞金を受く。
此の頃コンクールに於て數度の賞金を受く。
四谷に住居す。
夏。山崎君と再び大島へ行く。
歸京後貧しき生活の中より『ワレンス』夫人『モナリザ』と綽名せる落魄した名妓の生活を援けつゝ彼の女の美のクリエーションに醉つたこと。
酒の生活猛烈になる。
九月美術院第四回展覽會に『乞食と女』を出品す。

展覽會のある日かつて泥酔して下谷署の厄介に一夜なつたことから。同署長を會場に見出し『乞食と女』を彼れに紹介した皮肉あり。

十月同院院友に推選さる。

十二月山崎君と三崎へ無錢旅行をして葉山署の厄介になる。

一九一八　正月山崎君と別れて信州へ旅立つた筈なのが、龜戸天神附近の『すし屋』に十日許り世話になつてゐたことあり。

三月美術院第四回試作展覽會に『樹木』『自畫像』『九十九里の濱』『男の習作』外二點を出品し美術院賞金(甲種)を受く。大作『風せんをつく女』未完成に終る。

山岳會主催展覽會に『秩父風景』二點出品。

四月根津六角堂の中に山崎君と住む四月中旬突然結核性肺炎に襲はる。八月中百號大油繪『煙草をのむ男』製作の上第五回美術院展覽會に出品し落選す。(これは後に破る)

九月千葉九十九里濱に轉地療養す。

十月房州波太地方に流浪し自殺せんとして自から救ふ事度々。當時多量の飲酒の後雨中海岸の岩に寢ね死に瀕す。咳血は岩を紅に染めしと云ふ。

十一月清水賞太郎氏より賞學金として毎月三十圓づゝ支給さるゝ事となり、代々木に初めて一家を借りて住む。

一九一九　二月美術院試作展覽會に『松と榎』『雪の次の日』『松の群』『自畫像』『松と家』『大島風景』『某侯爵邸遠望』『代々木の一部』を出品し美術院賞を受く。

流行性感冒に襲はれ臥床中一夜附近畑中にたをれ居たるを友人に發見され翌二月二十日午前二時死去。

享年二十四、同夜美術院同人石井鶴三氏に依つて『デット、マスク』を作らる。

二月二十八日谷中功德寺に送葬す

一九二〇　六月雜司ヶ谷共同墓地に假埋葬し同十月友人等によつて墓碑建設さる。

槐多畫集
定價四圓五拾錢

大正十年十一月十二日印刷
大正十年十一月十八日發行

編者　山崎省三
東京市神田區中猿樂町十五番地
合資會社アルス代表者

發行者　北原鐵雄
東京市神田區中猿樂町十五番地

發行者　鈴木泉藏
東京市芝區愛宕町二丁目一番地

印刷者　松井勇

東京市神田區仲猿樂町十五番地
合資會社アルス
振替東京二四八八八番
電話九段二一六九番

發行所

版權所有

(小川製本)

3 2950

槐多の歌へる

村山槐多遺稿

豐麗な天分を抱きながら惜くも二十四歳で悲壯な最後を遂げた美術院々友村山槐多氏の詩歌感想等を收めたのが本書である。彼は最も勇敢に藝術に向つて突進した。彼は火の樣な戀をした。彼は絶えず異常な性慾に苦しめられた。彼はよく飲みよく描き、よく歌つた。さうして世に不思議な數多の勝れた作品を殘しながら忽然としてその天才的短生涯の幕を閉ぢてしまつた。本書を讀む人は誰れでも彼の卒直さと力强さと魔法の樣な怪しい美しい情想に魅了されて驚嘆の聲を惜まないであらう。

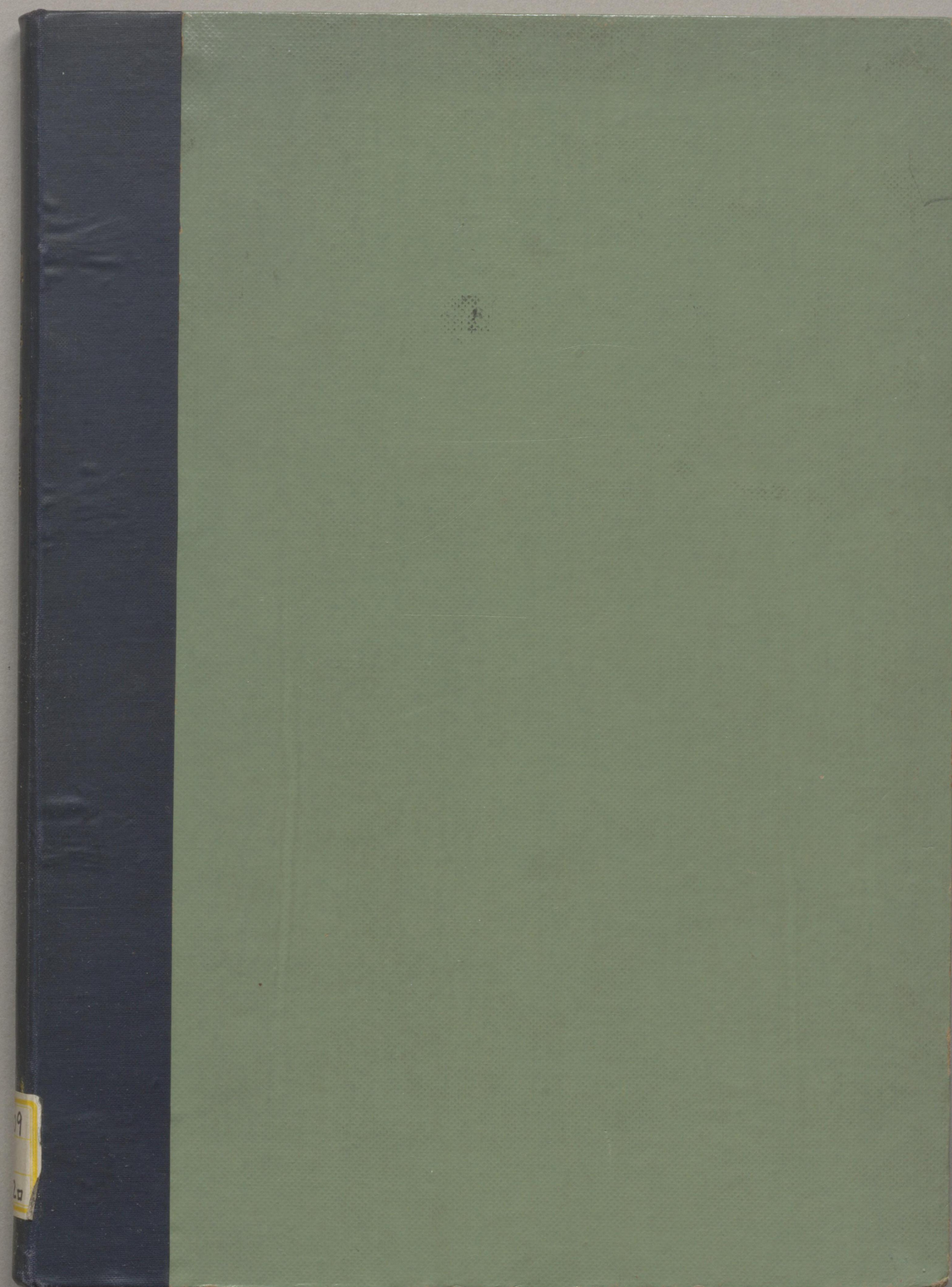
——四六判總布製箱入——

定價貳圓五拾錢　送料拾四錢

槐多の歌へる其後

村山槐多遺稿

本書は稀有の名著として讀書界を驚倒せしめたる『槐多の歌へる』の續篇也、收むるもの、散文詩、小說、怪奇小說、戲曲童話、感想等にして、瑰麗の文辭を驅使して爛熟せる官能の美を歌ひ、奔放意表に出づるの想を描く處、獨り佛蘭西の鬼才ランボウに其匹儔を見るべし。卷末百餘頁に亙る『槐多の話』は親友三氏が槐多の生活、逸話、奇行等を細叙し、天才兒槐多の面目を躍如たらしめ尙一段の興趣を加ふるもの也。槐多の藝術を愛する人々、及人として槐多を知らんとする人々の一讀を要す。

定價貳圓五拾錢　送料拾二錢

509
42□